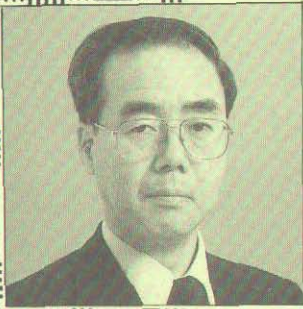


若者の理工系離れについて

企画理事 田崎 公郎



我が国の研究技術者は年々減少する一方で、2005年には98万人の需要に対し48万人が不足する。科学技術庁と未来工学研究所は、9月にこんな推計をまとめて発表しました。また、本学会でも会員数が4万人弱で伸び悩んでおり、特に若手会員数が少なく平均年齢が急速に高くなる状況にあります。最近の若者の理工系離れは、将来の日本の科学技術の発展を左右するぐらい深刻な問題であります。そのため技術開発に携わる者の一人として、21世紀に向けて若者の理工系への関心を取り戻すための問題点について若干考察してみます。

研究技術者は、本来、複雑怪奇な人間臭い社会活動より、自然や物を対象にした独想的な研究活動や技術的創造性を生かした物作りの面白さに無上の喜びを感じる人種であると思います。理工系の若い学生は、これまでその魅力にひかれて大学に、そして企業に職を奉じてきました。それが結果的に今日見るような我が国の力強い技術開発力つまり企業の商品競争力の向上につながってきていると考えております。

しかしながら、経済大国といわれ、金持ち日本といわれ、その気になって改めて周囲を眺めてみますと、世界の先進国の中で日本の大学ほど劣悪な環境の中で研究を強いられている国はないということに気がつきます。一方、企業も地道な技術開発や物作りを大切にするマインドが希薄になり、金融ビジネスや安易なマネーゲームにシフトしていくケースが少なからず見受けられます。処遇面でも法曹ビジネスや金融ビジネスに比べ、地道な研究開発や物作りが社会的に正しく評価されているかについては問題なしとはしないところであります。

昨今のバブル崩壊騒動でもおわかりのように、泡は所詮泡であり中身の無いものであります。このあたりで、国も企業も初心に帰り、今一度研究開発と生産的な企業活動の重要性を再認識し、研究技術者にとって魅力のある環境作り、処遇の改善に力を入れることが必要なのではないでしょうか。そうした姿勢を若者に示すことで研究開発分野への魅力が増大し、再び理工系への関心を取り戻すことができると確信しております。